

アメリカの未来と2020年7月18日 - その三

見る目と聞く耳は幸いである。

Jeff Pippenger

2023-08-25

改革運動の系譜は、黙示録10章の「七つの雷」を理解するうえでの鍵である。「七つの雷」は、第一の天使の使命に力が与えられた1840年8月11日から、1844年10月22日の大失望に至るまでの歴史を表している。10章は、この理解を支持する三つの内的証拠を章の中に示している。

「1840～44年の再臨運動は、神の力の栄光ある顕現であった。第一の天使のメッセージは世界のすべての宣教地に伝えられ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来いかなる地でも見られなかったほどの強い宗教的関心が起こった。しかし、これらは第三の天使の最後の警告のもとでの力強い運動によって、さらに凌駕されるであろう。」大いなる論争、611。

第一の天使のメッセージは、1840年以降、世界に伝えられた。ユライア・スミスは、ホワイト夫人と一致して、開拓者たちの理解を表明している。スミスは、第一の天使が1798年に到来したことを認め、1840年に下ってきたのも第一の天使であったことを示している。スミスと開拓者たちは、メッセージの到来とそれに力が与えられることとの区別に、単に気づいていなかった。スミスは明確に述べている。すなわち、黙示録10章の天使が一方の足を海に、もう一方の足を地に置いたとき、それは世界に伝えられているメッセージを指し示したのだと。

したがって、1798年に、キリストの来臨が間近に迫っていると宣言することに対する制限は廃された。1798年に終わりの時代が始まり、小さな巻物から封印が解かれた。それ以来、黙示録14章の天使は神の裁きの時が来たと宣べ伝えて出て行き、また同じ時代以来、10章の天使も海と陸に立ち、時はもはやないと誓った。両者の同一性について疑いはない。片方を位置づけるためのすべての論拠は、もう一方にも同様に有効である。現今の世代がこれら二つの預言の成就を目撃していることを示すために、ここで議論を展開する必要はない。再臨の宣教において、特に1840年から1844年にかけて、それらは全面的かつ詳細に成就し始めた。この天使が一方の足を海に、もう一方の足を陸に置いていることは、その宣告が海路と陸路を通じて広範囲に及ぶことを示している。もしこのメッセージがただ一つの国のためだけに意図されていたなら、天使は陸上にだけ立てば十分であったはずである。だが彼は片足を海に置いている。そこから、そのメッセージが大洋を越え、地上の諸国民および世界各地に及ぶと推測できる。そしてこの推測は、前述の再臨の宣告が世界中のあらゆる宣教拠点に達したという事実によって、いっそう確証される。この点については第14章でさらに詳しく述べる。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録の考察』521頁。

したがって、第十章一節は1840年8月11日を指し示している。というのも、その時に、黙示録九章の予言と一致して、予言されていたオスマン帝国の覇権の終焉が到来したからである。ホワイト姉妹は次のように述べている。

「1840年には、予言のもう一つの顕著な成就が広く関心を呼んだ。その二年前、再臨を宣べ伝える指導的な説教師の一人であったジョサイア・リッチが、『黙示録』9章の解説を發表し、オスマン帝国の没落を予告した。彼の計算によれば、『この勢力は……1840年8月11日に打ち倒される。そのとき、コンスタンティノープルにおけるオスマンの権勢は打ち碎かれると見込まれる。そしてこれは、私の考えでは、事実であることが判明するだろう』。」

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた。この出来事は予言を正確に成就した。それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた。学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

第十章の第一節は1840年を指し、十節では1844年10月22日にヨハネが苦い失望を味わうのを見る。ヨハネは、その小さな書物のメッセージを世界に伝えたが、結局1844年10月22日に苦い失望を味わうことになった人々を代表していた。第一節から第十節は、1840年から1844年までの歴史を表している。これが第十章における一つの内的証拠である。

もう一人の証人はヨハネで、小さな巻物を食べるとそれは口に甘く、1840年8月11日のメッセージを彼が受け入れたことを表し、その後、1844年10月22日の大失望のときには腹の中で苦くなった。

そして私は天使の手から小さな巻物を取り、それを食べた。するとそれは口には蜜のように甘かったが、食べた途端、腹は苦くなった。ヨハネの黙示録 10:10

第十節は、1840年から1844年に至る歴史そのものを一節の中に表している。それは、「七つの雷」がその歴史を表していることを示す、本章における第二の内的証拠である。ホワイト夫人はすでに、「七つの雷」が、第一と第二の天使のメッセージのもとで生じた出来事の列挙を表していることを明らかにしている。第二の天使のメッセージは大失望で終わったのだから、「七つの雷」はまさに同じ歴史を表している。1840年8月11日から1844年10月22日の大失望に至る歴史が、黙示録第十章で強調されている預言的な歴史であるという真理を支持する内的証拠は三つある。

そして最後の節では、「七つの雷」に結びついた真理に即して、メッセージを提示すること、そしてまさにその歴史が繰り返されねばならないことが命じられている。

彼は私に言った。「あなたは多くの民、諸国、諸言語、王たちの前で、もう一度預言しなければならぬ。」ヨハネの黙示録 10:11

七つの雷は、アドベンティズムの始まり-「終わりの時」に封印が解かれたメッセージが力を与えられたときに始まった-が、アドベンティズムの終わりを例証すること、すなわち1989年に封印が解かれたメッセージが、黙示録十章の天使ではなく黙示録十八章の下ってくる天使の降臨によって力を与えられるときを示している。黙示録十八章の天使は2001年9月11日に降臨し、私たちは今、1840年から1844年の歴史の繰り返しの終結に近づいている。

第十章に関するこれらの所見は、何年も前からパブリックドメインにある。ごく最近まで認識されていなかったのは、その聖なる歴史には、その内部に埋め込まれたもう一つの聖なる歴史が存在するという点である。その歴史は、物事の終わりをその始まりと同一視する「アルファとオメガの原則」を受け入れる者にしか認識されない。聖なる歴史に埋め込まれたその歴史は、失望から始まり、大失望で終わる。1843年から1844年の歴史は、1840年から1844年の歴史の中にありながら、それとは区別される特別な歴史の流れである。ホワイト姉妹とキリストの双方が、この歴史の流れに言及している。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「見ているあなたがたの目は幸いであり、聞いているあなたがたの耳は幸いである。まことにあなたがたに言う。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願ったが見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったが聞けなかった」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いである。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

「預言者たちと義人たちはそれらのことを見ることを望んできた」ものとは、「1843年と1844年に見られた」事柄のことである。イエスはこの聖なる歴史について二つの福音書で言及しているが、いずれも異なる文脈でなされている。

彼は多くのことを彼らにたとえて語って言った。「見よ、種を蒔く人が蒔きに出て行った。すると、蒔いているうちに、ある種は道ばたに落ち、鳥が来てそれを食べてしまった。ほかの種は土の少ない岩地に落ち、土の深みがないので、すぐに芽を出した。けれども日が昇ると焼けつき、根がないために枯れてしまった。さらに、あるものは茨の中に落ち、茨が伸びてそれをふさいだ。ところが、ほかのものは良い地に落ち、実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍になった。聞く耳のある者は聞きなさい。」そこで弟子たちが近寄って言った。「なぜ彼らにたとえてお話しになるのですか。」彼は答えて言われた。「天の御国の奥義を知ること、あなたがたには許されているが、彼らには許されていないからである。持っている者にはさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられる。だから、彼らにはたとえて話す。彼らは見えても見ず、聞いていても聞かず、また理解しないからである。こうして彼らには、こう言ったイザヤの預言が成就する。『あなたがたは聞き続けても理解せず、見続けても悟らない。この民の心は鈍くなり、耳は聞こえにくく、目は閉じてしまった。目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることもなく、立ち返ってわたしが彼らをいやすことのないためである。』しかし、あなたがたの目は見ているので幸いであり、あなたがたの耳は聞いているので幸いであ

る。まことにあなたがたに言う。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら聞けなかった。」 マタイによる福音書 13章3-17節。

マタイの福音書で、イエスは神の言葉の効力について語り、人々に「聞け」と呼びかけつつ、預言者たちが見たいと願っていたそのメッセージを拒むラオデキア人たちがイザヤ書6章に表されていることを示している。フューチャー・フォー・アメリカは、2001年9月11日の文脈でイザヤ書6章を繰り返して提示してきた。というのも、その日に起きたイスラムの攻撃によって、黙示録18章の力ある御使いが降りて来て、その栄光によって地を照らしたからである。預言者たちは皆互いに一致しており、イザヤ書6章3節にはまさにその御使いへの直接の言及が見いだされる。

ウジヤ王が死んだ年、私はまた、主が高くあげられ、御座に座しておられるのを見た。その衣の裾は神殿に満ちていた。その上にはセラフィムが立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼を持ち、二つで顔を覆い、二つで足を覆い、二つで飛んでいた。彼らは互いに呼び交わして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光で満ちている。」イザヤ書 6:1-3

黙示録18章の御使いが降りてくるとき、その栄光によって地は輝く。また、イザヤは、自分が聖所の幻を見たのはウジヤ王の死んだ年であったと告げることで、もう一つの重要な鍵を与える。ウジヤ王は神殿の中で祭司の務めを果たそうとした。八十人の祭司と大祭司がそれをさせまいと彼に抵抗したが、ついに主は彼の額にらい病を下された。彼は国家権力と教会権威を結び付けようとしたために、獣の刻印を受けた。彼はすぐに死んだのではなく、王座から退けられて交代させられ、時を経て最終的に2001年9月11日に死んだ。アドベンチスト教会は、キリストの時代のユダヤ教界がそうであったように、段階的に死んでいく。しかし、2001年9月11日には、すでにダニエル11章の最後の六節のメッセージを拒んでいたアドベンチズムは、アメリカ合衆国のプロテスタントの角として終わりを迎え、そのときイザヤによって象徴される者たちが、黙示録18章の第一の声で表されるメッセージを担うように召された。

そして祭司アザリヤは彼のあとに入って行き、彼と共に、勇敢な者たちである主の祭司八十人も入った。彼らはウジヤ王に立ちはだかり、彼に言った。「ウジヤよ、主に香をたくのはあなたの務めではない。それは、香をたくために聖別された、アロンの子孫である祭司たちの務めだ。聖所から出なさい。あなたは背いたのだ。これは主なる神の前であなたの誉れにはならない。」そのときウジヤは怒り、香をたくための香炉を手にしていて、彼が祭司たちに向かって憤っている間に、主の宮の香の祭壇のそばで、祭司たちの前で、彼の額にまでらい病が起こった。大祭司アザリヤとすべての祭司が彼を見ると、見よ、その額にらい病が現れていた。彼らは彼をそこから急いで追い出した。彼自身もまた、主が彼を打たれたので、急いで出て行った。こうしてウジヤ王は死ぬ日までらい病人であり、らい病人であったために隔離の家に住んだ。彼は主の宮から切り離されていたからである。一方、その子ヨタムが王宮を管轄し、国の民をさばいた。歴代誌下 26:17-21。

2001年9月11日にプロテスタントの角がセブンスデー・アドベンチスト教会から取り除かれたことを認識することは重要である。というのも、終わりの時代における黙示録のメッ

セージの封印が解かれることには三つの主要な要素があるからである。一つは、共和主義の角とプロテスタントの角の並行する歴史である。もう一つ認識すべき要素は、七つの教会の意義であり、そしてもちろん第三は「七つの雷」である。これら三つの預言的要素が、今まさに封印が解かれているメッセージを構成しており、キリストの時代にユダヤの教会が退けられたのと同様に、「終わりの日々」においてアドベンチズムが退けられていることを認識する必要がある。

イザヤは自分の時代に、神の不忠実な選民にメッセージを伝えることを進んで引き受け、イエスもご自身の時代に同じ状況に対処するために同じ言葉を用いた。契約によって選ばれた民は素通りされ、彼らは「聞く」ことも癒されることも拒んでいる。

彼は言った。「行って、この民に告げよ。『聞け、しかし悟るな。見よ、しかしわきまえるな。』この民の心を鈍らせ、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らはその目で見、その耳で聞き、その心で悟って、立ち返り、いやされることのないように。」イザヤ書 6:9, 10.

イザヤが担う務めは、ヨハネとエゼキエルが小さな書を食べたときに担った務めである。彼らは、主の口から吐き出されつつある契約によって選ばれた民に対して、叱責の言葉を伝える。預言者たちや義人たちが見たいと願った歴史についてイエスが言及した二度目は、ルカが記録している。

そして、カペナウムよ、天にまで高められたおまえは、地獄にまで突き落とされる。あなたがたに耳を傾ける者はわたしに耳を傾け、あなたがたを侮る者はわたしを侮り、わたしを侮る者は、わたしを遣わした方を侮る。そして七十人が喜んでまた戻って来て言った。「主よ、あなたの御名によって、悪霊さえ私たちに服従します。」彼は彼らに言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見た。見よ、わたしはあなたがたに、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力の上に立つ権威を与える。何ものもあなたがたを害することはない。しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」その時、イエスは霊において喜び、こう言われた。「天と地の主である父よ、あなたに感謝します。あなたは、これらのことを知恵ある者や賢い者から隠し、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、それがあなたの御心にかなったからです。すべてのことは、父からわたしに委ねられています。また、父のほかに子が誰であるかを知る者はなく、子と、子が父を現そうとする者のほかに、父が誰であるかを知る者はいません。」そして彼は弟子たちのほうに向き直り、ひそかに言われた。「あなたがたの目を見ていることを見るその目は幸いです。あなたがたに言います。多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら聞けませんでした。」ルカ 10:15-24.

あらためて言えば、義人たちが見ることを切望してきたものを見る特権を持つ人々に結びつく祝福の文脈は、素通りされつつあり、しかも「聞く」ことを望まない契約の選民に関するものである。ホワイト夫人は、大いなる光の拒否の象徴であるカペナウムに対するキリストの断罪に言及し、アドベンチズムへの叱責を角括弧に入れることでアドベンチズムを強調した。

神の子と称する者たちの間で、どれほど忍耐が乏しく示されてきたことか、どれほど多くの辛辣な言葉が語られ、私たちの信仰に属さない者たちに対してどれほど多くの非難が発せられてきたことか、多くの者は、主がそのようにご覧になっておられないのに、他の教会に属する人々を大きな罪人と見なしてきた。他の教会の信徒をこのように見る者たちは、神の力強い御手の下にへりくだる必要がある。彼らが断罪する人々は、わずかな光しか与えられず、機会も特権も少なかったのかもしれない。もし彼らが、私たちの教会の多くの会員が受けてきた光を持っていたなら、はるかに速い歩みで前進し、その信仰を世により良く示していたかもしれない。自分の光を誇りながら、その光に歩もうとしない者たちについて、キリストはこう言われる。「しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、ツロとシドンのほうが、あなたがたよりもなお受ける罰は軽いであろう。そして、カペナウム [大いなる光を受けてきたセブンスデー・アドベンチスト] よ、あなたは [特権の点で] 天にまで高められたが、地獄にまで引き下ろされるであろう。というのは、あなたの中で行われた力ある業がソドムで行われていたなら、あの町は今日まで残っていたであろうからである。しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、あなたよりもソドムの地のほうがなお受ける罰は軽いであろう。」そのとき、イエスは答えて言われた。「天と地の主である父よ、感謝します。あなたはこれらの事を、[自分たちの目には] 賢く思慮深いとする者たちから隠し、幼子たちに現してくださったからです。」

「そして今、あなたがたがこれらすべてのことを行ったゆえに、と主は言われる。わたしはあなたがたに朝早くから語りかけたが、あなたがたは聞かなかった。わたしはあなたがたを呼んだが、答えなかった。ゆえに、あなたがたが信頼し、わたしの名で呼ばれているこの家と、わたしがあなたがたとあなたがたの父祖に与えたこの所に対して、わたしはシロにしたとおりにする。わたしは、あなたがたのすべての兄弟、すなわちエフライムの全子孫を追い出したように、あなたがたをわたしの前から投げ出す。」 Review and Herald, 1893年8月1日。

アドベンチズムにおいてなされた「大いなるわざ」は、義人と預言者たちが見聞きすることを望んだわざであった。その大いなるわざは、「真夜中の叫び」のメッセージが宣べ伝えられた1843年と1844年の歴史において示されていた。アドベンチズムは自らの歴史、ことに1843年と1844年の歴史を拒んだ。失望に始まり失望に終わる歴史であり、しかも彼らを新しくされた地へと導くことを意図していた歴史である。

彼らは道の始まりで、自分たちの背後に明るい光を据えていたが、それは天使が私に「真夜中の叫び」だと告げたものだった。この光は道全体にわたって輝き、彼らの足もとを照らして、つまづかないようにした。

彼らが、すぐ前におられて彼らを都へ導いておられるイエスから目を離さなければ、彼らは安全であった。だがまもなく、ある者たちは疲れて、都ははるか遠くにあり、もっと前にそこへ入れるはずだと期待していたと言った。するとイエスは栄光の右の御腕を上げて彼らを励まされ、その御腕から光が発してアドベントの一隊の上に波打つように広がり、彼らは「ハレルヤ！」と叫んだ。ほかの者たちは軽率にも背後の光を否定し、ここまで導いたのは神ではなかったと言った。背後の光は消え、彼らの足元は完全な暗闇となり、彼らはつまづいて目標とイエスを見失い、道から外れて下の暗く邪悪な世へ落ちていった。初期の著作、15頁。

今、ユダ族の獅子が封印を解き明かしておられるのは、1843年と1844年の歴史である。「七つの雷」は1840年から1844年を表しているが、その期間には、契約の歴史の初め以来予表されてきた非常に特別な歴史が含まれている。各改革運動は互いに並行しており、同一の道標を持っている。もしそれらが互いに異なるものであったなら、サタンは各改革運動ごとに異なる攻撃計画を立てるだろうが、彼は決してそうしない。

しかしサタンは手をこまねいてはいなかった。彼は今、他のあらゆる改革運動で常に企ててきたこと、すなわち真の働きの代わりに偽物を押し付けて人々を欺き、滅ぼすことを試みた。キリスト教会の第一世紀に偽キリストがいたように、十六世紀には偽預言者が現れた。『大いなる論争』186。

私たちが伝えている全体的なメッセージという観点からこの箇所の本質的な点は、アドベンティズムがプロテスタントの衣鉢を担うことをやめ、2001年9月11日にその衣鉢が完全に取り去られた後でさえ、彼らはなお、自分たちこそ第三天使の大いなる叫びを告げる残りの民の運動だと主張し続けている、ということである。だが、彼らは偽物である。いまやどの運動がプロテスタントの角を帯びているのかを見分けられなければ、アメリカ合衆国における二つの角の対応関係を理解することは事実上不可能である。

1843年と1844年の歴史はあらゆる改革運動において現れており、ここでは、神に選ばれた民としての古代イスラエルの始まりと、同じく神に選ばれた民としてのイスラエルの終焉を用いて、現代イスラエルにおいても同様であることを示す。焦点は、各改革運動の諸系列に表されている1843年と1844年に置く。

モーセは、主が自分のような預言者を起こされると預言し、その預言者はイエスであった。使徒言行録においてルカは、イエスがモーセの預言を成就したことを確認している。

あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの兄弟たちの中から、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその者に聞き従わなければならない。申命記 18:15

イエスは、私たちが聞くべき預言者です。

モーセは確かに父祖たちにこう言いました。「あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために起こされる。その者があなたがたに語ることは何であれ、すべて聞き従いなさい。」そして、「その預言者の言うことを聞かない者は、だれでも民の中から滅ぼし去られる」ともあります。さらに、サムエルから後に続いたすべての預言者も、語った者は皆、同じようにこれらの日々について前もって告げました。あなたがたは預言者たちの子であり、また神が私たちの父祖たちと結ばれた契約の子です。神はアブラハムにこう言われました。「あなたの子孫によって、地のすべての族は祝福を受ける。」神はまずあなたがたのために、ご自分の御子イエスを起こしてお遣わしになり、あなたがた一人ひとりをその不義から離れさせて、あなたがたを祝福するためでした。使徒の働き 3:22-26

キリストの改革の系譜は、すべての改革の系譜がそうであるように、「終わりの時」に始まる。キリストの時代における「終わりの時」は、彼の誕生であった。聖書は、ダニエル書における「終わりの時」の定義に一致して、彼の誕生の時に知識の増大があったこ

とを示している。羊飼いたち、東方の博士たち、怒ったヘロデ、そして神殿のアンナとシメオンに至るまで、彼が生まれたときには知識が増し加わった。その時点で、ユダヤ教会の指導層は退けられた。離縁は段階的であったが、その始まりは、終わりの時に封印が解かれたメッセージを彼らが拒んだことにあった。

人々はそれを知らないが、その知らせは天を喜びで満たしている。光の世界からの聖なる者たちは、より深く、よりやさしい思いをもって地上へと引き寄せられている。その御臨在のゆえに、全世界はいっそう明るさを増している。ベツレヘムの丘々の上には、数えきれないほどの天使の群れが集められている。彼らは、この喜ばしい知らせを世界に告げる合図を待っている。もしイスラエルの指導者たちが託された務めに忠実であったなら、イエスの誕生を告げ知らせる喜びにあずかることができただろう。だが今、彼らは差し置かれてしまった。『The Desire of Ages』47.

アドベンティズムの指導部は、ダニエル書11章40節が成就した1989年に、見過ごされた。イエスの予型であったモーセの歴史における「終わりの時」は彼の誕生であり、そのとき、まず彼の家族に、続いてファラオの娘にとって、幼子モーセに関する知識が増し加わった。彼の名はもちろん「水から救い出された」という意味であり、イエスという名は「ヤハウエは救う」という意味である。

「終わりの時」の後、すべての改革の流れは、その特定の歴史において増し加えられた知識がメッセージとして体系化され、それが「終わりの時」に封印が解かれた光に対して責任を問われることになる世代への証として掲げうる時点を示している。

洗礼者ヨハネはキリストのメッセージを確立し、モーセのメッセージは、彼が四十歳のとき、自分の力でイスラエルをエジプトから救い出そうとしたときに確立された。エジプトからの解放というメッセージは、今や公の記録となっていた。

四十年後、モーセのメッセージは燃える柴のところでカづけられ、蛇に変わった杖と、モーセが懐から取り出したときにらい病に冒されていた手という、神性を示す二つのしるしがそれに伴った。イエスのメッセージはご自身のバプテスマにおいてカづけられ、その際には御父の御声と聖霊という二つの神性のしるしが伴った。両方の歴史における次の道標は、最初の失望、遅れの時、すなわち第二の天使の到来、1843年を表している。

モーセの歴史における失望は、天使が、息子に割礼を施さなかったためにモーセを殺そうとして降りてきたとき、彼の妻によって示された。恐れてチッポラは、自分の手で彼らの息子に割礼を施した。モーセは自分の息子に割礼を施すのを忘れていたのだ！アブラハムに与えられた契約のしるしそのものを、モーセは忘れていた。父祖アブラハムは、ヘブライ人がエジプトで捕囚となり、そこから解放されることを予言していたが、その預言はまさにモーセを通して具体的に成就するはずであり、それにもかかわらずモーセは息子に割礼を施すのを忘れていた。その時点でモーセは、解放の後まで、チッポラを彼女の父のもとへ帰らせて留まらせた。彼女は、モーセがイスラエルの子らを紅海の水を通して導くまで、ミディアンにとどまっていた。使徒パウロによれば、それは洗礼、すなわち割礼に取って代わったまさにその儀式を象徴している。その点を見落としてはならない。モーセの歴史において、最初の失望を生み出すことになる第二の天使を表す道標の到来は、アブラハムの神との契約関係における根本的な規定を退けることであった。

キリストの歩みの中での最初の失望はラザロの死であり、イエスが来るのを遅らせず、ラザロが死んで四日も経つ前に来ていたらそんなことは起こらなかったと、マルタとマリアは確信していた。親しい友であるラザロを死なせ、墓の中で朽ちるに任せたことによる失望は、二人の姉妹だけでなく弟子たちにとっても計り知れないほど大きかった。けれども、ラザロの復活は、キリストの宣教全体に対する決定的なしるしとなった。

キリストがラザロのもとへ来るのを遅らせたのは、彼を受け入れなかった人々に対するあわれみの目的があったからである。彼がとどまっておられたのは、ラザロを死からよみがえらせることによって、強情で不信仰な民に、ご自分こそまことに『よみがえりであり、いのちである』ことのもう一つの証拠を与えるためであった。彼は、イスラエルの家の貧しく、さまよう羊であるこの民への望みをすべて捨てることを、どうしてもしたくなかった。彼らが悔い改めないことのゆえに、彼の心は張り裂けんばかりであった。彼はあわれみにより、ご自分が回復者であり、ただお一人でのちと不滅を明るみに出すことのできるお方であることを示す、もう一つの証拠を与えようと定められた。これは、祭司たちが曲解することのできない証拠となるはずであった。これこそが、彼がベタニアに行くのを遅らせた理由である。この頂点となる奇跡、すなわちラザロの復活は、彼の働きと神性の主張に神の印を押すものであった。『The Desire of Ages』529ページ。

神の十四万四千人への印づけは、1843年と1844年の歴史において例証されている。というのも、凱旋入城の際にキリストをエルサレムへ導いたのはラザロであったと伝えられているからである。凱旋入城の歴史こそ、ホワイト夫人が1843年と1844年の真夜中の叫びを例証するために用いる歴史である。これは、キリストが神の創造の力によって死者をよみがえらせる権能を持っていることに関する誤解であった。マリアとエリザベツは、イエスが最後のラッパの時にラザロをよみがえらせる力を持っておられることは知っていると言明したが、その時その場で実際に彼をよみがえらせる力を持っておられることは理解できなかった。彼女たちは、彼の洗礼と死、すなわち彼自身の三年半の個人的な奉仕の始まりと終わりにおいて示しに來られたまさにその真理を否認していた。墓から石が取りのけられるまで彼女たちには見えなかったが、ちょうど、のちに1843年の図表のいくつかの数字の誤りから彼の御手を取り去られるのと同じである。

ファラオとの対決を前にツィポラを遠ざけた後、モーセは兄アロンに出会い、二人は第二の天使のメッセージを代表してエジプトへ向かった。エジプトに災いが一つでも下る前に、モーセはファラオに警告した。もし彼が、神の長子であるイスラエルが出て行って礼拝することを許さないなら、神はエジプトの長子を打ち殺すであろう、と。

主はモーセに言われた。「あなたがエジプトに帰るとき、わたしがあなたの手授けたすべての不思議をファラオの前で必ず行え。だが、わたしは彼の心をかたくなにするので、彼は民を去らせない。あなたはファラオに言え、『主はこう言われる。「イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。わたしはあなたに言う、わたしの子を去らせて、わたしに仕えさせよ。もし去らせることを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。」』」出エジプト記 4:21-23。

ミッドナイト・クライは、将来成就する予言だった。

イスラエルがエジプトから救い出される時、初子の奉獻が再び命じられた。イスラエルの子らがエジプト人のもとで奴隷の身にあったとき、主はモーセに、エジプトの王パロのところに行き、こう言うよう命じられた。「主はこう仰せられる。イスラエルはわが子、すなわちわが初子である。わたしはあなたに言う。わが子を行かせて、わたしに仕えさせよ。もしあなたが彼を行かせることを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、すなわちあなたの初子を殺す。」出エジプト記 4:22、23。

モーセは自分に託された言葉を伝えた。だが、高慢な王の答えはこうであった。「イスラエルを去らせるためにその御声に従えというが、主とは何者か。私は主を知らない。イスラエルを去らせはしない。」出エジプト記5章2節。主はご自分の民のために、しるしと不思議によって働き、ファラオに恐るべき裁きを下された。ついに滅びの天使に、エジプト人の間の人と家畜の初子を打ち殺すよう命じられた。イスラエル人が免れるため、彼らは屠られた子羊の血を門柱に塗るよう指示された。すべての家にしるしが付けられ、天使が死の使命を帯びて来たとき、イスラエル人の家々を過ぎ越すためであった。『時代の願望』51ページ。

ファラオに向けられた真夜中の叫びのメッセージは、ファラオの反逆への報いとして長子の死を告げるものだった。そのメッセージが記録に残されると、1844年の夏の真夜中の叫びの力を象徴する災厄がエジプトにもたらされた。1844年の夏、真夜中の叫びのメッセージは津波のように全土を席卷した。災厄はエジプト全土を襲い、約束された長子の死が訪れると、真夜中にエジプトじゅうで叫びが聞こえた。

モーセは言った。「主はこう仰せられる。真夜中ごろ、わたしはエジプトのただ中を行く。エジプトの地のすべての長子は死ぬ。王座に座しているファラオの長子から、ひき臼のうしろにいるはしための長子に至るまで、また、すべての家畜の長子も、エジプトの全地に大いなる叫びが起こる。かつてそのようなものはなく、これからも二度とないであろう。」出エジプト記 11:4-6

キリストのエルサレムへの凱旋入城はカルバリの十字架へとつながり、キリストの弟子たちと彼のほかの信奉者たちは大いなる失望を味わった。

私たちの失望は、弟子たちのそれほど大きくはなかった。人の子が凱旋のうちにエルサレムに入られたとき、彼らは彼が王として戴冠されるものと期待した。周辺一帯から人々が群がり来て、「ダビデの子にホサナ」と叫んだ。そして祭司たちと長老たちが群衆を静めるようイエスに願い求めたとき、彼は、彼らが黙れば石までも叫ぶであろう、預言は必ず成就しなければならないからだ、と宣言された。ところが数日のうちに、まさにその弟子たちは、ダビデの王座に就いて支配されると信じていた愛する師が、嘲りあざけるパリサイ人たちの上に高く掲げられた残酷な十字架にかけられているのを見た。彼らの大きな望みは打ち砕かれ、死の暗闇が彼らを取り囲んだ。『証言』第1巻、57、58。

弟子たちとミラー派の大失望は、ヘブライ人がファラオの軍勢と紅海の間にはさまれて身動きが取れなくなったことにも象徴されている。

「歴代に蓄えられた光が、私たちの上に輝いている。イスラエルの忘却の記録は、私たちの教訓のために保存されてきた。この時代に、神はあらゆる国民、部族、言語か

ら、ご自身のために民を集めるために御手を伸ばしておられる。再臨運動において、神はご自身の嗣業のために、イスラエルの民をエジプトから導き出されたときと同じように御業を行ってこられた。1844年の大失望において、御自分の民の信仰は、紅海におけるヘブライ人の信仰と同様に試みられた。」『Testimonies』第8巻、115、116。

キリストがエルサレムに入城したとき、その時の感動が賛美のどよめきを巻き起こし、ファリサイ派はそれを黙らせようとしたことを理解することが重要である。賛美の合唱の核心は、イエスが「ダビデの子」であるという言及であり、これは、詰問を重ねるユダヤ人との言葉のやり取りに終止符を打つためにキリストが用いた、まさにその象徴でもあった。ユダヤ人を最も苛立たせたのは、イエスを「ダビデの子」と呼ぶことが、暗にダビデ王のエルサレムへの凱旋入城に言及することになる、という認識であった。

ダビデが契約の箱をエルサレムに運んだ働きの歴史において、メッセージが力を帯びることは、ダビデが力を帯びることによって表された。

ダビデは進み、ますます大いなる者となり、万軍の主なる神が彼とともにおられた。サムエル記下 5:10。

その後、ダビデは神の箱をエルサレムへ運び上ろうと決意した。ダビデの町へ箱を運ぶにあたり、あらゆる改革の歩みに見られるように、失望が起こることになった。名が「力」を意味するウザは、自分が箱に触れる権限を与えられていないことを重々承知していながら、あえて触れた。そもそも神の箱が最初に捕らえられることになった原因こそ、主の啓示された御心への不従順と、神の箱に伴う力についての思い上がりであった。それでもなお、ダビデの勇士であったウザは、モーセが割礼の命令に背いたのと同じように、不従順にふるまった。ウザは打たれて死に、ダビデが、ウザの死後に箱がとどまっていた場所を見守っていた者たちが祝福されていると悟るまで、箱はエルサレムの外にとどまった。そこでダビデは再び、箱をエルサレムに運び入れるべく出立した。ダビデが踊りながらエルサレムに入ったとき、彼の妻は彼が身を露わにしているのを見て、ひどく失望した。

いずれも1843年と1844年に言及する三つの改革運動の系譜がある。これは、義人や預言者たちが見、また聞くことを切望した時期である。第二の天使の到来には、待機の時と失望を印づけるという特徴があり、それはどれも容易に見て取れる。より深い真理は、その失望がモーセやウザ、あるいはマルタとマリアの側の単なる誤解ではなく、その失望が生じたまさにその歴史に結びついた根本原則を拒絶したことに関わる失望であったことを示している。モーセにとってはそれは割礼のしるしであり、ウザにとっては契約の箱に関する神の命令に対する僭越であり、マルタとマリアにとっては復活させるキリストの創造の力への信仰の欠如であった。

モーセに関しては、彼の働きのまさに中心的な主題は、選ばれた民との契約関係を確立することだったが、モーセはその契約のしるしを忘れていた。ウザに関しては、それは契約の箱に体現されていた神の律法の神聖さという原理そのものだった。マルタとマリアの場合は、キリストの働きのまさに中心であり、それは彼の洗礼に始まり、その働きの初めに型として示されたとおりに、彼の死・埋葬・復活に至って終わるものだった。1843年の最初の失望は、ハバククの預言の成就とされた図表のいくつかの数値の誤りによっても

たらされた。その誤りは、ミラー運動の根本原則、すなわち一日を一年に当てる原則に関わるものだった。

「七つの雷」は1840年から1844年の再臨運動を表しているが、その運動の中には1843年から1844年の歴史があり、それは失望に始まり失望に終わるため、その歴史にはアルファとオメガの署名が記されることになる。そしてその歴史こそ、イエスとエレン・ホワイトが、義人たちが常に見ることを切望してきた聖なる歴史であると指し示すものである。

モーセ、ダビデ、キリスト、そしてミラー派という四つのラインは、世の終わりに十人の乙女のたとえが繰り返されるとき、力を受けるのは第二ではなく第三天使のメッセージであり、その後には失望が続き、その失望が遅延の時を開始する、と教えている。

1840年8月11日に第一の天使が降臨したとき、それはミラー派の最重要の預言解釈の規則を確認し、彼らの最初の失望はその規則と特に結び付けられることになった。その失望と遅れの時が真夜中の叫びで終わったとき、そのメッセージもまた一日を一年とする原則に関係しており、キリストが1844年10月22日に来臨すると特定したことも同様であった。1840年から1844年にかけての四つの道標はすべて、一日を一年とする原則に関連していた。

ユダヤ人は神の律法の受託者とされ、モーセの時代に示された主題は神の律法とその定めであった。ダビデの歴史においても、やはり神の律法であった。キリストの歴史においてもそれは神の律法であった。というのも、神の律法によって罪人に明らかにされた罪の赦しは、血が流されることなしにはありえないからである。しかし、アドベンチズムには、神の律法だけでなく預言のことばも委ねられた。

したがって、ミラー派の歴史の流れにおける主題は、神が定めた預言の原則である。アドベンチズムの終わりには、再び預言解釈の原則が主題となるが、1844年以降、時の預言はもはや適用されない。終わりにおける原則は、アルファでありオメガである方が初めから終わりを示されるという前提に基づいている。

イスラム教の預言的活動を表す第二の災いの成就としてオスマン帝国の覇権が終わったとき、黙示録9章15節の391年と15日の預言が成就し、ミラーの働きのまさに核心である「一日＝一年の原則」が確認された。

イスラムが2001年9月11日に攻撃を加えたとき、黙示録8章13節の成就として第三の災いが到来し、フューチャー・フォー・アメリカの働きの核心にあった原則が確認された。その原則とは、端的に言えば、歴史は繰り返すということである。イスラムを表す災いのラッパに関する預言は、1840年に黙示録10章の御使いが、また2001年に黙示録18章の御使いが成就したとき、確認された。歴史は繰り返された。次に予期されるのは失望である。

その失望は、待機の時を到来させるであろう。その失望は、その働きに関わる者たちを落胆させ、彼らを散らすであろう。その失望は、予言の根本法則、すなわちアドベンチズムの初めに確立された予言の第一原則を無視したことによって引き起こされるであろう。2001年9月11日に与えられた力はイスラム教と関連しており、2020年7月18日の失望はイスラム教をめぐるものであった。私たちは、サミュエル・スノーらがその後、1844年10月22日という日付を認識できるようになったのは、1843年の図表にある一部の数値の誤りか

ら主が御手を取り除かれたためである、と知らされている。するとスノーとミラー派は、二千三百年の預言の成就を1843年と予告させたのと同じ証拠こそが、1844年10月22日を特定することを可能にしたまさに同じ証拠であることを見いだした。

イエスと天のすべての軍勢は、魂の愛するお方のお姿をひと目見たいと甘美な期待を抱いて切望していた者たちに、憐れみと愛をもって目を注がれた。試練の時に彼らを支えるため、天使たちは彼らの周囲にとどまっていた。天のメッセージを受けることを怠った者たちは暗闇に置き去りにされ、神が天から彼らに送られた光を受け入れようとしなかったゆえに、神の怒りが彼らに対して燃え上がった。主がなぜおいでにならなかったのか理解できずに失望した忠実な者たちは、暗闇に置き去りにされなかった。彼らは再び聖書に導かれ、預言の期間を調べた。主の御手が数字から取り除かれ、その誤りが明らかにされた。彼らは、預言の期間が1844年にまで及んでいること、そしてその預言の期間が1843年に閉じることを示すために彼らが提示していたのと同じ証拠が、実は1844年に終結することを証明していることを見た。神の言葉からの光が彼らの立場を照らし、彼らは「たとえそれ [幻] が遅くなっても、それを待て」とあるように、遅れの期間があることを見いだした。キリストの直ちの来臨への愛のあまり、真に待ち望む者たちを明らかにするために計られていた幻の遅れを、彼らは見落としていたのである。彼らは再び期日を得た。しかし私は、彼らの多くが激しい失望を乗り越えて、1843年に彼らの信仰を特徴づけていたほどの熱心さと活力を持つには至らないのを見た。

私たちは、2020年7月18日にイスラムが米国を攻撃するとする予測を導いた証拠が、近く訪れる日曜法の時に、イスラムこそが米国に下される裁きであること、そしてその出来事にはもはや時間的要素が結び付かないことを確認するはずだと期待すべきである。

1840年から1844年にかけての歴史における四つの主要な道標。すべての道標は、ミラーの主要な規則（一日を一年とする原則）の適用と関連づけられている。

2001年の歴史には、日曜法に至るまで四つの主要な道しるべがある。2001年9月11日はイスラムだった。2020年7月18日の失敗した予測はイスラムに関するものだった。すべての道しるべは、Future for America の主要な規則—歴史の繰り返し—の適用と結びついている。「七つの雷」は、順序に従って明らかにされる将来の出来事を表している。四つの道しるべの最初は2001年9月11日であり、第三の災いの成就として、イスラムによるアメリカ合衆国への攻撃を示していた。最後の道しるべ、すなわち私たちの歴史における日曜法を表すものは、イスラムに関するものでなければならない。というのも、アルファでありオメガである方は常に初めから終わりを示し、その方こそ、まさにこの歴史のために「七つの雷」を封印した方だからである。日曜法の時に、イスラムはアメリカ合衆国を攻撃するだろう。

これは、今まさに明らかにされつつある「七つの雷」の封印が解かれることに関する三つの主要要素の一つである。モーセが自らの時代において真夜中の叫びを象徴するメッセージを告げたとき、最終段階は急速に進んだ。長子に関する預言が成就してエジプトで真夜中の叫びを引き起こすまで、超自然的で壊滅的な十の災いが続いた。キリストがエルサレムに入られたとき、十字架へと至る急速な歩みが始まった。メッセージが告げられると、もはや後戻りはできなかった。1844年8月12日のエクセターのキャンプ集会から、二か

月足らずで、その預言は成就した。

主の言葉が私に臨んだ。「人の子よ、イスラエルの地で彼らが言っている『日は長引き、すべての幻は外れる』というあの諺は何か。だから彼らに告げよ。『神である主はこう言われる。わたしはこの諺をやめさせる。イスラエルではもはやこれを諺として用いない。むしろ彼らにこう言え。『日は近く、すべての幻の成就も近い。』』イスラエルの家のうちには、もはやむなしい幻も、へつらいの占いもない。わたしは主である。わたしが語れば、わたしの語る言葉は成就し、もはや引き延ばされることはない。反逆の家よ、あなたがたの日に、わたしは言葉を語り、それを行う、と神である主は言われる。」 さらに主の言葉が私に臨んだ。「人の子よ、見よ、イスラエルの家の者たちはこう言っている。『彼が見る幻は多くの日の後のことであり、彼は遠い時代について預言している。』それゆえ彼らに言え。『神である主はこう言われる。わたしの言葉は、もはや一つとして引き延ばされない。わたしが語った言葉は行われる。』と神である主は言われる。」 エゼキエル書12章21-28節